

随想 二天一流 案

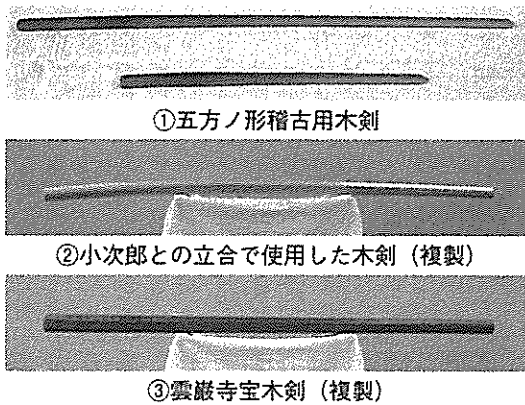


一川 英機

熊本市の西方に金峰山という小山があり、中腹に雲巖禪寺という古刹がある。寺の奥にある洞窟を靈巖洞と称する。周りは古木大樹が鬱蒼と茂り背後は絶壁。前面のみ開かれ、人の訪れがあればその姿は数刻前より望むことができる位置にある。生涯に六十余度の試合を行い一度も敗れなかった宮本武蔵が独座安心して修業の道をまとめるには絶好の場であった。武蔵が『五輪書』の著作に入ったのは寛永20年である。熊本に入ったのは57歳、細川忠利公の側にあつて書画、連歌、彫刻等剣法以外の諸芸に親しみ晩年の人生を楽しんだと伝えられている。入国翌年『兵法三十五ヶ条』を著し献す。しかし君臣水魚の交わりも忠利公の急逝で終る。武蔵の落胆は大きかった。剣技のみではなく兵法の精神を治世の上に活かしたいとの思いが絶たれたのである。細川家に身を寄せた口上書に「時により国の治め様」と書いたのも剣の理をもつての治世の実践に満々たる自信があつたのであろう。

忠利公の逝去後、靈巖洞に籠もり『五輪書』の完成に力を注ぐの

である。『五輪書』に「兵法の道二天一流と号し」と書き著してあり、初めて「二天一流」が流儀名として世に出たのである。我が国における剣法の流儀は江戸中期の資料では二百余諸流といわれているが、その中で「二天一流」は流祖自らの筆による伝書（『五輪書』）があること、またそれが文章としても分り易く技術的にも精神的にも武蔵は一流の指導者といふことができる。二天一流は、『五輪書』文中に「二刀一流」とも書き記すので、左右両手に大小二刀をつかう流派と受け取られがちであるが、真の意味は「武士は将卒ともに二刀を腰に帯びている。この二刀（太刀・脇差）の長所を知らせる為に二刀



一流と云う」と記している。常日頃から左右両手とも不自由なく使えるように鍛錬することが肝要であり、持てる道具は残さず役に立てたいものである。また本来太刀・脇差は片手で持つ道具である。「もし片手にて打殺し難き時は両手にも打ちとむべし。手間の入ることにもあるべからず」と言い切っている。

武蔵は晩年を熊本で過ごし『兵法三十五ヶ条』、『五輪書』、『独行道』の著作を残し二天一流五方ノ形を後進に委ねた。その心法、技法に誤りなきよう故剣道範士一川格治および熊本県剣道連盟有志が志を継承し現在も鋭意活動中である。

熊本には二天に関わる木剣が3種類現存する。

①は、二天一流 五方ノ形稽古用木剣。太刀 長さ3尺3寸5分（約101・5cm）、小刀 長さ2尺（約60・6cm）である。

これは軽く、薄く作られた木剣で、女性でも少年少女でも容易に扱える。太刀筋を理解させるためのもつと伝えられている。

②は、佐々木小次郎との試合で使用した木剣。太刀 長さ4尺1寸6分（約125・8cm）、重さ20匁（約85g）。

巖流小次郎との立合に使用した木剣は現存しない。武蔵が熊本へ



(カット・青木千代子)

招かれた折に当時の細川家家老・長岡佐渡守興長・細川家の縁戚で、熊本市の南に位置する八代3万石の城主。船島（巖流島）の試合の立合人でもあった人物である。この人の孫が「巖流との立合の木剣はどのようなものであったか」と尋ねた際に武蔵は「実物を作つてご覧に入れます」と白樫の棒を削り作り上げたものである。

③は、雲巖寺宝木剣。太刀 長さ4尺1寸6分（約125・8cm）、重さ30匁（約142.5g）。

靈巖洞に籠もり『五輪書』執筆の折に素振り用に使用したと伝えられる。赤樫材。

それぞれの木剣は、①日常の稽古用、②試合用、③素振り用と用途・目的は異なるが、3種類の木剣を手にとってみると持ち主の考え方、合理性、目的意識が木剣の手ざわりを通して感じられる思いがして感無量であった。

昭和14年生まれ。熊本商大卒。旭化成株を経て現在第一生命(株)剣道部師範、北友会師範、杉並区剣道連盟指導員、杉並二天会師範。剣道教士七段。